

バハー・ウッディーン・ナクシュバンドの 生涯とチャガタイ・ハン国の終焉

川 本 正 知

は じ め に

I バハー・ウッディーン・ナクシュバンドの生涯

1 バハー・ウッディーンの伝記

2 バハー・ウッディーンの経歴再考

3 アミール・コラルに弟子入りする以前のバハー・ウッディーン

II 最後のチャガタイ・ハン

お わ り に

は じ め に

イスラム神秘主義スーフィズムを奉じるスーフィー教団(タリーカṭariqa)の一つナクシュバンディー教団(Naqshbandiyya)とは、14世紀中央アジアのブハラのスーフィー、バハー・ウッディーン・ナクシュバンド Bahā' al-Dīn Naqshband (1318~89)にさかのぼる道統(silsila)を持つ一群のシャイフたちが率いたイスラム文化圏各地域の多数の教団の総称である⁽¹⁾。

教団の始祖・名祖のバハー・ウッディーンは、チャガタイ・ハン国崩壊と共に中央アジアの覇権闘争の表舞台に上がってきた多くの在地実力者のなかから頭角をあらわしてきたティムール Tīmūr (1336~1405) が、競争相手を打ち倒し、チャガタイ・ハン国西部の諸勢力を併せ、ティムール朝を興し(1370年春)、征服戦争によって世界帝国を形成していくまさにその時代の中央アジアに生きた。ティムールの出自や政治的舞台登場後の競争相手たちとの闘争については多く

(1) スーフィー教団一般の歴史は川本(2000):208-17, ナクシュバンディー教団の歴史の概略は Algar (1990a): 3-44参照。

の研究がなされているが [Manz(1989):21-127, 間野(2001):317-44, 401-23], ティムール登場以前, 特に末期のチャガタイ・ハン国については, 支配の実態はもとよりハンの在位年代さえ明らかではない⁽²⁾。

本研究では, 教団の名祖バハー・ウッディーン・ナクシュバンドの伝記を再考し, 彼の経歴を可能な限り明らかにし, そこで得られた信頼しうるクロノロジーとこれまで十分に利用されることのなかった貨幣研究 [Oliver(1888), (1891), Mayer(1998), Schwarz(2002), Fedorov(2008)] の成果に基づく検証によって従来不明確であった西暦1340年代前後のチャガタイ・ハン国⁽³⁾のハンたちの在位年代を確定し, 今後の研究の基礎とする。

I バハー・ウッディーン・ナクシュバンドの生涯

1 バハー・ウッディーンの伝記

彼の伝記として, フランスのモレによって, ナクシュバンディー教団研究の根本資料として「発見」された Ṣalāḥ b. Mubārak Bukhārī, *Anīs al-Ṭālibīn wa 'Uddat al-Sālikīn* サラーフ・ブン・ムバーラク・ブハーリー『アニース・アッターリビーン』(ATUS) がある [Molé(1959):38]。写本には, 「長編」(version longue) と「短編」(version abrégé) の二つの版があるが, 「短編」といっても「長編」にはない逸話を載せ, 要約本ではなく, 互いに「異本」というべきものである [Algar(1987):76-77, Paul(1998):10-11]。ATUS「長編」の諸写本による校訂本 ATUS「長編」tx. が1993年テヘランで出され, ATUS「短編」は, パटना Patna の Khuda Bakhshi Oriental Public Library から, 同館

(2) 例えば, 後述するタルマシリン・ハンの在位年代は1326~34年とされ, 在位1318~26年とされたケベク・ハンとの間の2人のハンの存在は完全に無視されている [Manz(1989):24]。

(3) 遊牧民の人民と軍隊からなる遊牧国家としてはチャガタイ・ウルス (ulus-i Chaghatay) といわなければならない。しかし, 1320年代には, チャガタイ・ハン権力は, ハンの名前の打たれたコインを領内各地で発行するなど, 定住民の多く住むマー・ワラー・アンナフルやフェルガナなどの領土支配を指向していたように思われるので, 一定の領土を支配する王朝国家として, 英語 Čaghatay Khānate, フランス語 khanat de Čagatai を「チャガタイ・ハン国」と訳す。

所蔵の、856/1452年に書写されたジャーミー Nūr al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān Jāmī (1414~92) 自筆写本からの刊本 AT̤US「短編」tx. が1996年にだされている⁽⁴⁾。

いくつかの写本でバハー・ウッディーンの第二ハリーファ（後継者）とされるホージャ・ムハンマド・パールサー Khwāja Muḥammad Pārsā (1348~1420) が著者とされ、その可能性は高いが⁽⁵⁾、その他の写本に書かれた Ṣalāḥ b. Mubārak Bukhārī という著者名の説明がつかない。著者は、自分のことについて、本文中に、「このか弱き僕 ^{しもべ} Ṣalāḥ b. Mubārak Bukhārī」は、785/1383-84年に、バハー・ウッディーンの第一ハリーファ、ホージャ・アラー・ウッディーン・アッタル Khwāja ‘Alā’ al-Dīn ‘Aṭṭār (d. 802/1400) のもとに至り、彼の紹介によってバハー・ウッディーンに師事することになった、と書くのみである〔「長編」tx.:66〕。著者は明らかにバハー・ウッディーンに直接教えを受けた弟子であり、当書は師の死後に書かれた⁽⁶⁾。著者が弟子入りしたのは師の死のわずか6年前であり、それ以前のことについての記述は全て伝聞によるものであろう。

2 バハー・ウッディーンの経歴再考

AT̤USは、「伝記」といわれてはいるが、そこには著者の体験と思われる逸話はほとんどなく、他の弟子たち（単に darwīshī となっている場合が多い）やその

(4) この刊本 [AT̤US「短編」tx.] は校訂本ではないが、手もとの2写本（「短編」ms. A, B）と校合してみると、2写本の中での配列とは異なるものの、写本にある逸話は全てこの刊本にあり、ジャーミー写本は、「短編」の完全な写しであることがわかる。刊本の編者は「長編」を完本と考え、「短編」の写本を「ジャーミーによる要約」と考えたのであろう。逸話の配列がなぜ異なっているのかはわからない。なお、この貴重な刊本のコピーは真下裕之氏から送られた。ここに記して謝意を表する。

(5) バハー・ウッディーンの「お言葉集」Qudsiyya『クドゥスィーヤ』を校訂出版したイラーキーは、その序文としてナクシュバンディー教団にかんする優れた研究を書いているが、著者をパールサーとしている [‘Irāqī (1975):74-75]。

(6) ハッジ・ハリーファは著作年を785年とし、アルガーもそれに従っているが [Haj. Khal. I:487, Algar(1987):76]、上記の年代を著作年代と誤解したのであろう。

他の人びとが語る師の言葉や師自ら語る奇蹟の数々を記録することによって師のスーフィー聖者としての偉大さを記録することを目的として書かれ、現代的意味での伝記や回想録ではない。しかし、それぞれの逸話に付せられた簡単な状況説明によって生涯の事蹟が復元され、現在までナクシュバンディー教団が伝えている始祖の伝記的記述のほとんどはこの本に依っている。特に経歴の復元に大きな影響を与えたのは、ファフル・ウッディーン・カーシフィー Fakhr al-Dīn ‘Alī Kāshifī (867/1463~939/1532-33) が16世紀初頭に書いた *Rashahāt ‘Ayn al-Ḥayāt* 『ラシャハート』(R) である。現代の研究も、主に、ファフル・ウッディーンが ATUS から多くを引用して書いたバハー・ウッディーンの伝記的記述 [R:I, 95-101] に基づいてその生涯を略述している [‘Irāqī (1975):40-44, Algar(1989), (1993), 間野(2001):384-85]。

それによると、彼は、718年 Muḥarram 月/1318年3月、ブハラ市近郊(東12km)の、後にカスレ・アーレファーン Qaṣr-i ‘Ārifān とよばれるようになるカスレ・ヒンドゥヴァーン Qaṣr-i Hinduwān (または Kūshk-i Hinduwān) 村に生まれた⁽⁷⁾。18歳のころに、祖父が師事していたホージャガーン Khwājagān とよばれていたスーフィー教団のシャイフ、ムハンマド・バーバーイ・サンマースィー Muḥammad Bābā-yi Sammāsī に師事し、サンマースィーが「お隠れになった (dar parda shudand)」時 (755/1354-55年)、祖父は彼をサマルカンドに連れていき、そこで「ダルヴィーシュや霊的な人びと (ahl-i dilī)」に会って教えを求めたのだが、ふたたびブハラに帰り、サンマースィーの第一ハリーフであったホージャガーン教団のサイイド・アミール・コラルル Sayyid Amīr Kulāl (d. 772年 Jumādā al-Awwal 月8日/1370年11月28日) のもとで修業を続けた [[長編] tx.:83]。そして、終にアミール・コラルルは、自分は師として教えの全てを授けたことを彼に伝え、「今ここで、[聖なる] 香りが汝の嗅覚に達した場所において、トルコ(人)からもタジーク(人)からも (turk wa tāzīk) 学ぶことの許し (ijāzat) を与えよう。学ぶにおいて、自らの志に従い、怠慢であ

(7) 現在彼のマザールのあるカスレ・アーレファーンについては、‘Irāqī (1975):40, note 2, 44-45 参照。

ってはない⁽⁸⁾」〔「短編」tx.:65〕と言い渡した。師の下を去ったバハー・ウッディーンは、アミール・コラルルの第二ハリーファとされているマウラーナー・アーリフ・ディーグガラニー Māwlānā ‘Ārif Dīg-garānī に7年間仕えた。また、トルコ人のシャイフで、ヤサヴィー教団 (khānadān-i Khwāja Aḥmad Yasawī) に属するクサム・シャイフ Qutham Shaykh のもとに二、三ヵ月とどまった〔「短編」tx.:65-66〕。ファフル・ウッディーンは、同じくトルコ人のシャイフのハリール・アタ Khalīl Atā に12年間仕えたとし、「その(コラルルの「許し」)後、自らホージャ様はマウラーナー・アーリフと7年間交際なさり、それからクサム・シャイフとハリール・アタへのご随伴に至った。12年間ハリール・アタと共にいた」と続けている[R:I, 97]。師のもとを去ったのは、師の死772/1370年以前ということになる。また、ファフル・ウッディーンは、バハー・ウッディーンを、アミール・コラルルの最も優れた弟子でありその第一ハリーファとし、ホージャガーン教団の始祖ホージャ・アブド・アルハーリク・グジドゥワーニー Khwāja ‘Abd al-Khāliq Ghujidwānī (d. 575/1179-80 or 617/1220-21) にさかのぼる道統の上では、アブド・アルハーリクから6代目のアミール・コラルルを継ぐ7代目シャイフであったとしている[R:I, 85]。

晩年に2度のハッジを行った後、「数え切れぬほどの弟子がいた」このシャイフは、791年 Rabī‘ al-Awwal 月3日/1389年3月2日、73歳で亡くなり、生地カスレ・アーレファーンに葬られた[R:I, 101]。

以上のナクシュバンディー教団のつたえる始祖の伝記的記述によって、われわれは、彼が若いころからホージャガーン教団に属するスーフイーとして修業し、晩年にいたるまで幾人かの師のもとで修業を続け、その後自らホージャガーン教団7代目のシャイフとして多くの弟子を集め育てたとの印象をうける。

確かに、ATUSでも、バハー・ウッディーンはサンマースイーの弟子とされ〔「長編」tx.:113〕、またアミール・コラルル自身がサンマースイーは自分に

(8) 刊本では、taqṣīr mī-kunīd となっているが、ma-kunīd (ms. A:127b, ms. B:137a) が正しい。ジャーミーの写し間違いか、校訂のミスなのかはわからない。

バハー・ウッディーンの教育を遺言として (waṣīyyat) ゆだねたと話したと、バハー・ウッディーンが語っている [[長編] tx.:83]。しかし、祖父の師であり、彼自身の師でもあったというサンマースイーについて、バハー・ウッディーンはほとんどなにも語っていない。アミール・コラルととの師弟関係においては、ホージャガーン教団の声をだして行うズィクル「公のズィクル」(dhikr-i ‘alā-niyya) の修業に対して、バハー・ウッディーンが、始祖のホージャ・アブド・アルハーリク・グジドゥワーニーの「霊的な教え」(tarbiyat az rūḥāniyya) に従って声をださないズィクル「秘密のズィクル」(dhikr-i khafiyya) による修業を実践し、それがためにコラルの他の弟子たちとの間に確執が生じたことなど、さまざまなことが書き残されているのに比べれば、サンマースイーについては、伝聞と思われること以外はほとんど名前が出てくるだけである。実際にサンマースイーに師事していたのであれば、もっと多くのことが書き残されていると思われる。実は、コラルに師事する以前に彼がいったい何をしていたかはよく解らないのである。

また、師の許しを得て、第一ハリーファの彼が、第二ハリーファとされるマウラーナー・アーリフ・ディーグガラニーに7年間仕えたというのも奇妙である。後述する、コラルの他の弟子の系統の聖者伝によれば、彼は最も優れた弟子とは見なされておらず、R が主張するようにコラルの第一ハリーファとしてホージャガーン教団7代目とされたということもはなはだ疑わしい。

また、最後に仕えたシャイフとされているトルコ人シャイフ、ハリール・アタについても、この歳でバハー・ウッディーンが12年間も仕えたとされているのは不自然である。R とは異なり、AT̤US では、コラルの「許し」をうけた後に続けて書かれているのは、マウラーナー・アーリフ・ディーグガラニーに7年間仕えたこととトルコ人シャイフ、クサム・シャイフのもとに二、三か月とどまったことだけで、ハリール・アタについての記事はまったく別の場所に書かれている。ファフル・ウッディーンは、AT̤US のハリール・アタについての記事を、始祖の生涯のどこに位置付けていいのかわからなかったため、その最後に12年間と書き込んだと推定される。ではハリール・アタに師事したのはいつのことだったのだろうか。

3 アミール・コラルに弟子入りする以前のバハー・ウッディーン

ハリール・アタについて、ジャーミーは、彼のスーフィー列伝 *Nafahāt al-Uns min Ḥaḍarāt al-Quds* 『ナファハート』(N) に、AT'US「短編」からバハー・ウッディーンの言葉をそのまま転載し [N:389]、モレは、AT'US「長編」からそれを訳している。夢に、ヤサヴィー教団の始祖アフマド・ヤサヴィー *Aḥmad Yasawī* (d. 1166-67) の第四ハリーフアのハキーム・アタ *Ḥakīm Atā* (d. 1187) [R:I, 17-23] が現れることから、ハリール・アタも、クサム・シャイフと同様にヤサヴィー教団のシャイフであろうとモレは考えているようである [Molé(1959):48-49]。ここでは、他の記述で補いつつ、「短編」tx:63-64から訳してみよう。

私どものホージャ様——神よ、彼の霊を浄めたまえ——は次のようにおっしゃった。同じころ⁽⁹⁾、ある夜、トルコ人の最も偉大なシャイフのひとりハキーム・アタ——神が彼に恵みを垂れますように——が、私をひとりのダルヴィーシュへ推薦している夢をみた。目覚めた時、そのダルヴィーシュの姿が心に残っていた。私には敬虔な父方の祖母がいたのだが、その夢を彼女に告げたところ、彼女は「孫よ、お前には、トルコ人シャイフたちから幸運 (*naṣība*) がもたらされるのだろう」と言った。その時以来ずっと私はそのダルヴィーシュを探し続けていた。ある日ブハラバーザールで彼に遇った。訊ねると名はハリールであった。しかし、その時は彼と同席することも話すこともできず、彼と交際する機会はなかった。私は家に帰った。夜になると使いのものが来て「ダルヴィーシュ・ハリールがあなたに会いたがっている」と伝えた。ティール月であったので、果物をもってでかけ、彼のもとに行った。彼に会ったとき、私は夢のことを話そうとした。彼はトルコ語 (*zabān-i turkī*) で「お前の心にあることは全て私には

(9) 「長編」tx:81-86および「短編」写本 [ms. A:48b-51b, ms. B:92a-94a] では、この話は、「18歳のころ」で始まる話の次の話になっている。ところが、ジャーミーが書写した「短編」tx:63では、その二つの話の間に別の話が57ページ分ある。前者の配列が正しいと考えられ、「同じころ」とは「18歳のころ」のことである。

解っている。話す必要はない」と言った。私の心の状態は変化し、彼との対話 (ṣuḥbat) を心から望んだ。そして彼との対話のなかで、彼によって素晴らしい「状態」(aḥwāl) や見たこともないような驚異〔が現れるの〕をしばしば目にしたものだった。

しばらくして、彼は、マー・ワラー・アンナフルの王国の帝王 (pādshāhī-yi mamlakat) となった。彼は、スルタン・ハリールと呼ばれた⁽¹⁰⁾。さまざまな理由で、私は彼に付き従い奉仕しなければならなかった。付き従っている時にも、彼による偉大なる事柄を見た。彼は私にはやさしくしてくれ、ある時は親切に、ある時には強制的に私に奉仕の儀礼 (ādāb-i khidmat) を教えてくれ、それによって私は多くの利益を得た。この「道」の〔この時点での〕「宿所」(maqām-i sayr wa sulūk dar īn rāh) においては、私には「力」(quwā) こそが必要だったのだ。公的には、彼の権力 (saltanat) に対する儀礼を守り、私的には、彼との特別な交友関係の親近者 (maḥram) であるという仕方⁽¹¹⁾で、6年間彼に仕えた。彼が王 (malik) になる以前にも6年間彼との間の交友関係があった。彼は、宮廷の側近たち (khawāṣṣ-i bārgāh) の前で、よく「至高なる神の満足のために私に仕える者は、人びとの中で偉大な者となろう」と言っていた。私には、彼が誰のことを言っているのか解っていた。

この期間の後、彼の正統なる王国は滅亡し、瞬時にして王も家来たちも従者たちも空中の微塵となって消えた。現世と世俗の仕事〔に対する情熱〕

(dunyā wa kār-i dunyā) は、私の心において完全に冷えきった。私はブハラに帰り、ブハラの村の一つリーヴァルトゥーン Rīwartūn に住んだ。

このバハー・ウッディーンの回想により、ハリール・アタはスルタン・ハリールとしてマー・ワラー・アンナフルの王国の支配者になったこと、バハー・ウッディーンは彼に12年間仕え、6年間はこの王の宮廷の側近

(10) この文は「短編」ms. B:93b, 「長編」tx.:84 にのみある。

(11) この文は、「短編」tx.64, ms. B:93b にはなく、「短編」ms. A:51b, 「長編」tx.:85, N:389にある。ジャーミー書写の『短編』の写本になくて、Nのテキストにあるのは不思議である。

(khāṣṣa)として仕えたこと、その12年間は現世の仕事に情熱があった18歳頃からであり、その後ブハラに帰ったことがわかる。

トガンは、キュタヒヤ Kūtahya のタヴシャンル Tavşanlı にあった写本 *Manāqib-i Amīr Kulāl Sākhūrī* (sic.) (ms. Zeytinoğlu kütüphanesi, 169) に、このハリール・アタ、スルタン・ハリールなる人物が、実在のチャガタイ・ハンであった証拠を見いだした [Togan (1968)]。トガンはこの写本がどういった著作であるかについてなにも述べていないが、この書は、アミール・コラルルの2番目の息子アミール・ハムザ Amīr Ḥamza (d. 1406) の孫マウラーナー・シハブ・ウッディーン Mawlānā Shihāb al-Dīn が15世紀初めに書いた曾祖父の聖者伝『アミール・コラルル・スーハーリー伝』*Maqāmāt-i Amīr Kulāl Sākhūrī* (MAK) で、1909年にブハラで出版されている。この石版本は語句が抜けていることが多くてよくないので、トガン論文の転写を参考にしつつ、手もとの写本から問題の部分を訳してみよう。

ホージャ・バハー・ウッディーンは帝王カザン Qaḍān のもとで首切り役人 (jallādī) をしていた。ある日、ひとりの男が告発を受けて、帝王カザン・スルタンの前に引き出された。カザン・スルタンは処刑を命じ、ホージャ・バハー・ウッディーンは彼を処刑場 (qiṣāṣ-gāh) に連れて行き、座らせ、剣を抜いて、礼拝をして、剣をその男の首に打ち下ろした。首は切れなかった。2度目に打ち下ろしたが、また切れなかった。3度目にホージャは怒りだし、怒り狂って剣を降り下ろしたが、首を切り落とすことは出来なかった。しかし、ホージャ・バハー・ウッディーンは、剣がふり上げられる度に、彼の舌が動いていることに気がついていたので、しばらくしてホージャは「全ての創造物の命はその能力の拳のなかにある神の権能にかけて言ってくれ。剣を役にたたなくするためにお前は何を唱えたのか」と訊ねた。男は「私は何も言っていません。しかし、私は、私自身のシャイフの裾を掴み、シャイフによって至高なる神のもとに逃れたのです」と言った。ホージャ・バハー・ウッディーンは「おまえのシャイフは誰か」と訊いた。その男は「私のシャイフはアミール・コラルル様です。彼の上に神の慈悲があらんことを」と答えた。ホージャ・バハー・ウッデ

イーンは〔以前にも〕アミール・コラル様の名を耳にしたことがあったので、この状態を目の当たりにした時、剣をなげすて、アミール・コラル様に向かって「このような幸福が私に訪れたのに、なぜ、このような人間に仕え、こんなこと（処刑）に従事しなければならないのでしょうか。剣の下弟子をも見守っているような人に、神の寛大さや恩恵があることに、なんの驚きも不思議もない」と言ったのである。

対句

神の人びとは神ではない　だが神から離れることもない

いかなることも、至高の神の命令なくしては不可能であり、たとえ髪の毛一本たりとも神の命令なくしては抜くこともかなわぬことを確信せよ。

ホージャ・バハー・ウッディーンが〔コラル様のもとに〕来た理由は以上のようなものであった。彼はアミール様——彼の上に慈悲があらんことを——のもとに来て、その幸運なる裾を掴み、至高の神への道を歩む人びとの一人となったのである。[MAK ms.:21a-b, Togan(1968):783-84, MAK:22-23]

この話は、彼がアミール・コラルのもとに来る以前にカザン・スルタンとよばれる支配者に首切り役人すなわち死刑執行人として仕えていたことを前提として作られている。トガンは、彼が仕えた支配者スルタン・ハリールとカザン・スルタンとは同一人物であり、さらに、その支配者は、747/1346年にカラウナス qārāunās のアミール、アミール・カザガン Amīr Qazāghān との2度目の戦いにおいて殺された最後のチャガタイ・ハン、「ヤサウルの子カザン・スルタン Qazān Sultān b. Yasaur」であり、また、それは後述するイブン・バットウータの伝える「スルタン・ヤサウルの息子ハリール」であるとした [Togan(1968):777-84]。しかし、トガンは、おそらく名前の一致から直感的に判断した結論を述べているだけで、年代の考証を含めた論証をしているわけではない。

聖者伝研究として AṬUS を本格的に取り上げたユルゲン・パウルは、1990年に書かれた「チャガタイ・ハン国におけるシャイフと支配者」においてこの問題にも取り組み、「トガンによって主張された〔チャガタイ・ハンの〕ハリー

ルとカザンが同一人物であるという説は、貨幣学の研究成果を無視している。トガンはコインをまったく取り上げようとしない。系譜テキストの矛盾に対しては、必ずコインの証言を優先させなければならない」とトガンを批判し、その考察の結果、確かに、74x 年にサマルカンドで、744年にブハラで打たれたコインにはスルタン・ハリール、ハリール・テムルという支配者の名前が刻印されているが、ハリールはカザンの前の支配者であるとし、「カザンとハリールを同一視することは貨幣学の報告に矛盾する。——中略——そのことから、私は彼らの同一視に対して懐疑的にとどまりたい」とした [Paul (1990): 285]。コインの検討の結果、二人のハンが相次いで即位し、その二人がすでに早い段階に混同され同一視され、バハー・ウッディーンが仕えた支配者の名前としても混同されたのだというのである¹²⁾。

パウルが見ている貨幣学の研究は、Oliver (1888) だけであり、もう一つのコインの打刻年代の研究である Oliver (1891) を文献にあげてもおらず、今日から見ればまったく不十分である。また、彼は、AT'US に書かれたバハー・ウッディーンが支配者に仕えた6年間のバハー・ウッディーンの生涯のどこに位置するかについてまったく考慮していない。

筆者は、研究発表「バハー・ウッディーン・ナクシュバンドとチャガタイ・ハン」[1993年11月14日史学会大会(『史学雑誌』102-12, 1993:105)]において、チャガタイ・ハンのカザンとハリールは同一人物であり、バハー・ウッディーンのハリール・スルタンも後述するイブン・バットゥータの伝えるスルタン・ヤサウルの子のハリールも同一のチャガタイ・ハンであることを指摘した。この論証は改めて第Ⅱ章において行う。

彼が首切り役人であったということについてはどうであろうか。

パウルは、「MAK には、バハー・ウッディーンの〔シャイフとしての〕偉大さを貶めようとする偏向性がある。著者は、アミール・コラルの息子であった自分の祖父を最も偉大な曾祖父の後継者であると見なし、ナクシュバンデ

(12) バルトリドは1927年の著作において、「ハリルの兄弟カザン・ハン」としている [小松久男監訳『トルキスタン文化史 1』平凡社, 2011:224]。Oliver (1888): 127 の見解に従ったのであろう。

イー教団系の著者たちのようにバハー・ウッディーンをそうとは見なさなかったのである」[Paul (1990):286] と述べ、彼が首切り役人であったとする記事は、これを彼の好ましからぬ前歴として描いているのであり、にわかには信じられないとする。

実際、この書には、上記の記事の後、バハー・ウッディーンのスーフィーとしての資質を貶めるような記事が続いている [MAK ms.:22b-23a]。

これに対して、筆者は、バハー・ウッディーンの言葉の中の「宮廷の側近 (khāṣṣa)」という言葉に注目した。ガズナ朝 (977~1187年) 宮廷の研究によれば、「khāṣṣa の中にナディーム、カーティブ、医師、ハーディム (khādim「従僕」) の職務をもつものが含まれ」、「彼らが——中略——宮廷においてスルタンの側近くに仕え、政治上の要事に関与し、後に行政府や軍における要職を得ている」場合があり、スルタンの「側近的支配体制」を形作っていたことが明らかにされている [稲葉 (1995):109-107]。チャガタイ・ハン国末期のハン政権下で、ガズナ朝のように、行政、軍事、宮廷が明確に分けられていたとは考えにくい、そうであれば一層、側近の集団が、処刑をも含めた君主の命令の執行機関であった可能性は高いと思われる。

また、首切り役人であったことを述べているのは反ナクシュバンディー教団の傾向をもつ MAK だけではない。AT'US にもそれらしい記述がある。バハー・ウッディーンの住むブハラに使いしたあるダルヴィーシュの、はじめて訪れたその村での体験である。

そこに、一人の女が坐っていたので、彼女に、「シャイフ・バハー・ウッディーンの家はどこかね」と尋ねた。彼女は、意地悪く (bi-jafā mash-ghūl shud), 「この村にはシャイフはいないよ。詐欺師 (ṭarrārī) の首切り役人ならいる。家はあれだよ」と言った。私はびっくりした。[「短編」 tx.:49, ms. A:122b, ms. B:134b, Paul(1990a):286]

AT'US の著者は女の言葉を信じなかったから、ここにこうして記録されたのであろうが、それによりバハー・ウッディーンの生前から、彼の住む村には、彼はもと首切り役人の詐欺師との「言説」があったことが伝えられることになった。

ファフル・ウッディーンの記述にもよく似た「言説」を伝えている箇所がある。15世紀後半、ティムール朝のスルタン・アフマド・ミールザー（在位1469～94）の統治するサマルカンドにおいて、ナクシュバンディー教団のシャイフ、ホージャ・アフラル Khwāja Aḥrār (1404～90) が、すでに廃止されていたイスラム法に反する商税タムガ税 (tamghā) をアミールたちに賄賂を送って復活させようとしたサマルカンドの〔旧〕タムガ収税人 (tamghā-chī) たちに対して、「ホージャ・バハー・ウッディーン様は、しばらくの間、首切り役人をなさっておられた。我々は彼の徒弟 (shāgird) でもあるぞ」[R:II, 540] と言って威嚇し、その直後サマルカンドの11人のタムガ収税人が一晩の内に殺害された事件が記されている。15世紀のホージャ・アフラルも始祖が死刑執行人であったとの「言説」を知っていたのである。

以上、筆者は、バハー・ウッディーンが、18歳ごろから12年間少なくとも後半の6年間は二つの名を持つ一人の君主に、死刑執行をも行う側近集團の一人として仕えたと考えているが、その君主がスーフィーであったことについては懐疑的である。

さて、ATUS には、バハー・ウッディーンがアミール・コラルのもとに至った理由を説明する、彼自身が語った話がもう一つ伝えられている。夢か現実かわからぬ長い話であるが、ジャーミーが『ナファハート』に引用し、モレによって全訳されているので、要点だけ紹介しよう [[長編] tx.:87-93, 「短編」 tx.:53-56, N:390-91, Molé(1959):38-40]。

「恍惚と不安定さが自らの中に卓越する初期の諸状態の段階において (dar awā'il-i aḥwāl wa ghalabāt-i jadhabāt wa bī-qarārī), 私は夜ごとにブハラ諸地方をめぐる、全ての聖者廟 (mazār) に行った」。ある夜、剣を持った二人の男に強制されて、「マズダーハンの廟」(mazār-i Mazdākhan) に連れていかれ、キブラに向かって思念しているうちに、無意識状態 (ghaybat) に陥り、次のような幻想を見た。キブラの壁が裂けて、そこに玉座に座った〔ホージャガーン教団の祖〕ホージャ・アブド・アルハーリク・グジドゥワーニーと彼を取り囲む彼のハリーファたちの一団がおり、そのうちの一人が、アブド・アルハーリク以下順番にハリーファの名前を紹介していき、ムハンマド・バーバーイ・サン

マースイーにまで至ったとき、「彼を指して、こうおっしゃった。『汝は、彼が生きている時に知っていたであろう。また、会ったであろう。彼は、汝のシャイフであった。汝に、帽子 (kulāh) を与えたはずだ。彼を覚えているか』。私は、『彼のことは覚えています、帽子のことはすぐに忘れてしまって、覚えていません』と答えた。『それは汝の家にある』とおっしゃった」。その後、アブド・アルハーリク・グジドゥワーニーから修業上の注意があたえられ、ナサフのサイイド・アミール・コラルルのもとに行くようにと命じられた。翌朝早く、リーヴァルトゥーンの自宅に戻り、「偉人たちの帽子」(kulāh-i 'azīzān)を探し出し、それを持ってナサフのある村に行ってサイイド・アミール・コラルルに会った。コラルルは、儀式的後に偉人たちの帽子を取り、「アミール(・コラルル)様は私に講義され、「肯定と否定」(ズィクルのことをさす)を、秘密の(無言の)やり方 (bi-ṭariq-i khafiyya)で行われた。しばらくの間私はそのやり方に従ってズィクルをおこなった。以上の出来事において、ホージャ・コラルルが私に命じたことに従って、決意して、公のズィクル(声をだして行うズィクル) (dhikr-i 'alāniyya)を行わず、声を出すことを棄てると宣言した」[「短編」tx.:56]と彼自身が回想している。

偉人たちの帽子がホージャガーン教団のハリーフアの^{しるし}標であり、バハー・ウッディーンはそれをすでにサンマースイーから受け取っていたのだが、忘れてしまっていて、755/1354-55年(ハバー・ウッディーン37歳の時)のサンマースイーの死後、リーヴァルトゥーンで「夜ごとにブハラ近郊をめぐっていた」時、夢でホージャガーン教団の過去の偉大なシャイフたちによってその所在を教えられ、それを持ってナサフのアミール・コラルルのもとへ至った、というのである。死刑執行人をやめたその足で師の許に赴いたという MAK の記述とは大きく異なる。また、この幻想の中でのホージャガーン教団の詳しい説明は、彼はサンマースイーを知っていただけであり、ホージャガーンの始祖アブド・アルハーリク・グジドゥワーニーの幻想の中のお告げによってアミール・コラルルのもとに就いて彼を師とするまで、彼はその教団のことをほとんど知らなかったことを示している。

37歳を過ぎてアミール・コラルルに弟子入りするまで、ハリール・アタ(後

のスルタン・ハリール)に18歳ごろから30歳ごろまで12年間仕えたこと以外、彼が何をしていたかわからないのである。

Ⅱ 最後のチャガタイ・ハン

スルタン・ハリールはともかく、MAKの「帝王カザン」は、ティムール朝年代記の伝える、カラウナスのアミール、アミール・カザガンとの747/1346年の戦いに敗れて殺された最後の実質的チャガタイ・ハンのカザンである¹³⁾。バルトリドは「彼以降のマー・ワラー・アンナフルのハンたちは全て単なる名目上の首長にすぎず、実際の権力は完全にトルコ人アミールの手に移った」と述べている〔Barthold (1956):137〕。ハンの時代は終わり、アミールたちが主役となって活躍する時代が始まったのである。

カザンはチャガタイ家の王ヤサウルの息子である。ヤサウルは、エセン・ブカ(在位1309~18)の時代1316年に、チャガタイ・ハン国からイル・ハン国に亡命し、1318年にイル・ハンに対する反乱を企て、1320年にイル・ハン国軍とケペク・ハン(在位1318~27)が派遣したチャガタイ・ハン国軍とに挟撃され殺された〔加藤(1999):43-71〕。ティムール朝の歴史家ハーフィズ・アブルーは、「諸王ヤサウルの王子ジュキと王子カザン(shahzāda-yi Ghāzān)と近親者たちとハトゥンたちは、全てケペクの軍隊の手に落ちた」〔DhJT:159〕とし、カザンがチャガタイ・ハン国側に捕らえられたとしているが、カザンについて語る同時代史料はなく、これ以外即位以前のカザンについてはなんの情報もない。

ニザーム・ウッディーン・シャーミーは、彼の『ザファル・ナーマ』の初めの部分に歴代のチャガタイ・ハン31人を列挙しているが、カザン・スルタン前後のハンたちは以下のようにになっている。

……(10)ドウワ・セチェン Duwa Chīchān, (11)ドウワの子クンチェツク Kūnchik・ハン, (12)ブリ Būrīの子ナリク Nālīqū, (13)ドウワの子エ

13) この戦いの詳細は、ZT (Tauer):6-8, ZT:185-89, YZN:49-50 参照。カラウナスについては、川本(2010):138-142を見よ。また、カラウナスのアミール・カザガンについては別稿を用意している。

セン・ブガ Īsan Būghā・ハン, (14) ドウワの子ケペク Kepek・ハン,
 (15) ドウワの子エルジギダイ Īlchikidāi・ハン, (16) ドウワの子ドゥレ・
 テムル Dūra Tīmūr・ハン, (17) ドウワの子タルマシリン Tarmashīrīn・
 ハン, (18) エブゲン Ībūkan の子ジnkシ Jīnkshī, (19) エブゲンの子ユ
 スン Yūsūn・テムル・ハン, (20) オゴタイの一族アリー・スルタン 彼
 は不法に帝位に就いた, (21) クンチェク Kūnchek・ハンの孫であり, プ
 ラド Pūlād の子のムハンマド⁽¹⁴⁾, (22) ヤサウルの子カザン Qazān・スルタン,
 (23) オゴタイの一族ダーネシュマンドチャ Dānishmandcha 帝位は彼に
 達しなかった, (24) ソルガトゥの子ブヤン・クリ Būyān Qūlī, (25) イス
 ン・テムルの子テムル・シャー, (26) イミール・ホジャの子帝王トゥグル
 ク・テムル, (27) トウグルク・テムルの子イリヤース・ホジャ, (28) ドル
 ジの子カーブル・スルタン, (29) ムハンマドの子アーディル・スルタン,
 (30) ソユルガトミシュ・ハン, (31) ソユルガトミシュの子スルタン・マ
 フムード・ハン [ShZN:13-14, 川口 (2007):200]

カザンまでの11人のハンのうち, (12) (20) を除く 9 人は, チャガタイ・
 ハン国「真の創設者」の (10) ドウワ (在位1282-83~1307) の息子たち, 孫たち
 である [加藤 (1999):37]。

(23) 以下は, (26) (27) をのぞいて, すべてアミール・カザガン, その息子
 のアブド・アッラー, カザガンの孫のアミール・フサインおよびティムールに
 よってたてられた傀儡ハンたちである⁽¹⁵⁾。

(26) (27) は, モグール・ウルス, いわゆるモグーリスターン・ハン国の初
 代と 2 代目のハンである。トゥグルク・テムルは, 空位時代の後に748/1347-
 48年に即位したとされる [TR:15-17, 30, 間野 (2001):251-53]。すでにアミール
 ・カザガンによって (23) ダーネシュマンドチャ, 続いて (24) ブヤン・クリ
 が傀儡ハンとして立てられていたから, この時点で, 旧チャガタイ・ハン国領

(14) YZN:218は Muḥammad b. Pūlād Oghul b. Kūnjek Khān b. Dūā Khān となっ
 ている。

(15) これらのハンたちの在位年代および傀儡としての存在意義については, 川口
 (2007):16-31参照。なお, (28) カーブル・スルタンはカーブル・シャーの誤り。

の西側の、名目的にチャガタイ・ハンを戴き、カラウナスのアミール・カザガンを長とするアミール連合としてのチャガタイ・ウルスと、東側のテンシヤン山脈北のモグール（モンゴル）とよばれる遊牧民の国家としてのモグール・ウルスとが並び立つことになった。その後、トゥグルク・テムルは、再統一を目論んで、モグール軍を率いて761年 Rabī al-thānī 月/1360年2-3月、翌年 Jumādā al-ūlā 月/1361年3-4月と二度にわたってマー・ワラー・アンナフルに攻め込んだ〔YZN:262, 274-75, 間野(2001):416-17, Jackson(2000)〕。

ティムール朝時代に書かれたヤズディーの『ザファル・ナーマ』の「序章」〔YZN:218, 250〕、ウルグ・ベグ『4ウルス史』*Ulūs-i Arba‘a-yi Chingizī*の要約とされる無名氏『チュルク諸族の系譜』〔ShAt:178a-79a〕、両書を見て書いているホンダミール『ハビーブ・アッシヤル』〔ḤS:91-92, ḤStr:52〕は、カザン・スルタンの即位を733/1332-33年とし、アミール・カザガンとの最初の戦いは746/1345-46年、翌年カルシー近くの2度目の戦いで死に、統治期間は14年としている。(21)以前のハンは、従って、733年より以前とされる。

また、この3書は、(17)タルマシリン・ハンと(18)ジンクシの間に、ほとんど同文のブラン・ハン (Būrān Khān b. Dūrā Tīmūr Khān b. Duwā Sechān Khān…) の記事を挿入している。

〔タルマシリンの〕甥のブランは、イスラム信仰の外見さえも欠いていたが、ジェテ⁽¹⁶⁾から軍を率いて、トルコの竜の年 (luy yīl türkiyye) にあたる728/1327-28年にケシュの郊外のクジ・ムンダク Qūjī Mundāq において、タルマシリン・ハンを殉教に至らしめた。彼はサマルカンド地方 (nawāhī) のある村に葬られた。——中略——ブランは、まったく指揮・統率をしていく能力がなかった。そして、エルジギデイ・ハンの子ドルジ (Dūrjī b. Īljikidāy Khān) やそのアタ・ベグのアミール・ジャウドウ (Jaudū) ほかのチャガタイ・ウルスの王族たちやウルスの大アミールたちを裏切りの剣にかけた。〔YZN:217, ShAt:177a〕

「ブランの反乱」といわれる事件であるが、ブランと次のジンクシの間には

(16) ジェテの意味については、間野(2001):264参照。

何があったかは書かれていない。

1340年代にダマスクスで著作した同時代人のウマリー (d. 1349) は、タルマシリンの後に、「ブズン (Büzün b.…) という名の〔それまでのハンたちとは違って〕ドゥワの子ではない男」が王権を狙って失敗し、「タルマシリンの死後、ジングス Jinghshū が即位するまで王国は混乱状態 (mutakhabbatan) であった」ことを伝えているので [MAMA:21-22], 「ブランの反乱」は実際に起こった事件である。

ハーフィズ・アブルーは、シャーミーと同様、ブランについては何も伝えていないが、彼のティムール誕生の736年の記述では、「マー・ワラー・アンナフルの王国すなわちチャガタイ・ウルス (ulūs-i Chagatāy) では、カザン皇帝が帝王であり、その皇帝位は1年が過ぎていた」[ZT:46] とし、即位は735年 (1334年9月1日～1335年8月20日) とし、「747年——中略——アミール・カザンが、マー・ワラー・アンナフルの王国 (mamālik) において、カザン・スルタン (Ghazān Sulṭān b. Yasaur b. Malik Tīmūr b. Būqā Tīmūr b. Qadāqī Sechān b. Būrī b. Mūatūkān b. Chagatāy Khān b. Chingīz Khān) を打ち破り、彼を殺した。——中略——カザン・スルタンは、マー・ワラー・アンナフルの全ての地方と、そこに接し連なるカラ・ホジャからダシュテ・キプチャクの果てまで、またシンド川 (インダス川) にいたるホラサーンの諸州までの領域を支配していた」[ZT:182, ZT(Tauer):6] とする。

以上の、ティムール朝の歴史家たちが伝える年代は、747年以前のカザンの在位年数を大きくとりすぎ、その結果、即位が733年か735年とされ、カザン以前の記録が全て繰り上げられてしまっている。上述の YZN, ShAt では、728年辰年にタルマシリン・ハンは「殉教」したとされていたが、タルマシリン・ハンが即位したのは、実際は731/1331年のことである [『元史』1:435, 植村 (1942):78, 佐口 (1942):178, 180, Biran (2002):744-45]。もしも、カザンが733年または735年に即位したとすると、ブザンの反乱もタルマシリンの後カザンに至るまでの4人のハンの在位期間も731年から2年間または4年間のことになってしまう。

同時代に中央アジアを経由してインドに入ったイブン・バットゥータ

(1304~68-69) は、733年の、すなわち1332年から1333年にかけての冬に、ナサフの近くのタルマシリンのオールドを訪ね、彼に会い、オールドに54日間滞在している [RIB:369-373, イブン・バットゥータ (訳):174-79]⁽¹⁷⁾。

また、イブン・バットゥータは、インドに就いて2年後すなわち736年以降(1335年8月21日以降)にタルマシリンの廃位と死についての情報を得たという。それによると、「彼の一族の長たちとアミールたちが、常に大軍がいる、中国(Şin)に隣接する彼の支配領域の辺境に集まり、ブザン・オグル Būzan oghli という名の彼の甥に臣従の誓いをし」、タルマシリンが、チングス・ハンが定めた王族、アミールなど支配者全員が参加すべき一年に一度の集会にこなかったこと、「ホラサーンに接する彼の支配領域に4年間もいて、中国に接する地方に一度も来なかったこと」を非難して、彼を廃位した。「慣習法では、王は、毎年この地方に就いて、その地の状況およびその軍隊の状態を知っておかなければならなかった。なぜなら、彼らの王はそこの出身であり、王国の首都はそこのアルマリク Almāliq の町であったからである」。ブザンが、大軍を率いて進軍すると、タルマシリンはアム川をわたって逃亡したが、バルフで捕らえられて、「すでにサマルカンド、ブハラに到着し、その住民が臣従の誓いをおこなっていた」ブザンに引き渡されたという。ナサフの近くで捕らえられ、そこで殺され、その地に埋葬されたともいわれる。また、生きてインドに現れたという話も伝えているが、インドでの話以外は中央アジアからの亡命者からの伝聞である。

オバンは、トゥグルク朝ムハンマド・ビン・トゥグルク(在位1324-25~51)が、734年(1333年9月12日~1334年8月31日)中に発布した布告(manshūr)にもとづき、タルマシリンの死は734年すなわち1334年8月以前におこったこととしている [Aubin(1976):22]⁽¹⁸⁾。その布告の内容は、マー・ワラー・アンナフルのシ

(17) イブン・バットゥータがタルマシリンと別れた日は「厳しい寒さ」であったこと、彼がパンジュ・アープすなわちインダス川に着いたのは734年 Muharram 月1日/1333年9月11日 [RIB:393, イブン・バットゥータ (訳):278] であったことから逆算した。

(18) 734年にテルメズで打たれたタルマシリンの銘を持つコインがある [Schwarz (2002):128 no.1103]。

ヤイフやウラマーや職人などへ、「信仰とシャリーアの敵」によって引きおこされた戦争、すなわち「ブザンの反乱」における略奪を避けて、インドへの移住を呼びかけるものであった。

同じくイブン・バットゥータによって、この混乱に乗じてヘラートのクルト朝のスルタン・フサインに軍事力と資金の援助を得た「ホラサーンにおいて敗北し〔て殺され〕たスルタン・ヤサウルの子のハリール (Khalīl ibn al-sultān al-Yasaur al-mahzūm ‘alā’ Khurāsān)」がマー・ワラー・アンナフルに攻めこみ一時的是ではあるが権力をとったことが伝えられている。ハリールは、ブザンと戦って殺し、サマルカンドにおいて8万人の兵を閲兵し、アルマリクにむかって軍を進め、タタル人の軍隊を、Aṭrāz (タラスとされる) に破り、アルマリクを経て、カラコルムとビシュバリクを征服した。サマルカンド、ブハラに帰還したハリールは、傲慢となって、スルタン・フサインと戦い、捕らえられ、「747/1346-47年の末、私がインドを出たときには、ハリールは捕虜の状態のままでフサインのもとにいた」[RIB:376-77, イブン・バットゥータ (訳):185-88]。

この話は、タルマシリンの話とは異なり、明らかにかなり後、イブン・バットゥータがインドを出る前に聞いた話であろう。また、この話には、後に考証するハリールの銘を持つコイン以外に傍証する記録がまったくない。ハンたちの即位年代を明らかにした後に取り上げることにする。

さて、上述の同系統の3書〔YZNの序説, ShAt, HS〕は、ブランの後、カザン・スルタンまでの間の(18)(19)(20)(21)のハンたちについて簡単な説明をいれている。

ジンクシ (Jingtū b. Ayūmken b. Duwā Sechān khān) は、ブランがジェテに帰った後、支配者となった。——中略——彼の兄弟ユスン・テムルが叛き、彼を殺した。ユスン・テムルは狂人であった。——中略——彼の王国の貴顕たちは彼を嫌悪した。この間にオゴタイ・ハンの子孫のアリー・スルタンが反乱を起こし、チャガタイ・ウルスを支配した。——中略——ムハンマド・ハンがアリー・スルタンの死後、皇帝位についた。圧政を終わらせ、再び、正義によってチャガタイ・ウルスを繁栄させた [HS: 91, HStr.:51]。

カザンの即位を733年、735年としているティムール朝年代記では、これら4人のハンたちの即位年、在位期間はわからない。イブン・バットウータもこれらのハンたちについては何も述べていない。しかし、中央アジア各地で打たれた、(20)アリー・スルタン以外の3人のハンたちの名をもつコインによって彼らの即位年、在位期間を絞り込むことができる。

(18) ジンクシ・ハンの名を持ち、736年(1335年8月21日～1336年8月9日)、737年(1336年8月10日～1337年7月29日)の年代を持つコインが、オトラル [Oliver(1891):12, no. 8, Mayer(1998):16, nos. 28-29], テルメズ [Schwarz(2002):128, no.1106], バダフシャー [Schwarz(2002):60-61, nos. 402-403] で打たれている。

(19) ユスン・テムルの名を持ち、737年、739年(1338年7月20日～1339年7月8日)、740年(1339年7月9日～1340年6月26日)の年代を持つコインが、アルマリク [Mayer(1998):24-25, nos. 88-89], オトラル [Mayer(1998):16-17, nos. 31-33], サマルカンド [Oliver(1891):12, no. 11, Fedorov(2008):98-99, nos. 988-89], テルメズ [Oliver(1891):12, nos. 9-11, Schwarz(2002):128-29, nos. 1106-11], バダフシャー [Schwarz(2002):60-61, no. 404] で打たれている。

(21) ムハンマド・ハンには、アルマリク [Mayer(1998):24-25, nos. 90-91] (年代不明) と テルメズ で打たれた741年(1340年6月27日～1341年6月16日)の年号のあるコインがある [Schwarz(2002):130-31, no. 1112]。

また、(18)(19)の兄弟と(20)オゴタイ裔のアリー・スルタンについては、アルマリクを訪れたフランチェスコ修道会の修道士たちの報告(日本語訳[東洋旅行記(1979):139-48, 154-55, 291-97])があったので早くから注目され、ほぼその統治年代はわかっていたが [Oliver(1888):113-17, Barthold(1956):135-37, 植村(1942):81-82], オバンは、新発見のネストリオス派キリスト教徒の墓碑に書き残された年代から、ジンクシの即位は1335年の末であることを明らかにした [Aubin(1976):24-25]。彼のコインの年代と矛盾しない。また、1338年8月付けのヴィトリアのパスカル修道士のアルマリクからの手紙にある「皇帝が実弟に殺された」という報告と、兄弟二人のハンのコインが同じ737年(1336年8月10日～1337年7月29日)に出されていることから、737年中にジンクシはユス



図1 左ジンクシ・ハンのコイン、右ユスン・テムル・ハンのコイン。いずれもバダフシャンで打たれた。Schwarz (2002) : 61, nos. 403-04 reproduced with kind permission of Ernst Wasmuth Verlag

ン・テムルに殺されたことがわかる。その後の報告によれば、1339年中に起こったアリソルダ王（アリー・スルタン）の篡奪の後、アリソルダ王によるパスクアルを含む修道士たちの「殉教」がおこり、「しばらくして後」アリソルダ自身が殺されたとされ〔東洋旅行記（1979）:147〕、「殉教」の1年後1340年にアルマリクに入ったマリニヨリのジョバンニ修道士はそこで「自由に公然と説教し

た」ことを伝えている〔東洋旅行記（1979）:154-55〕。ユスン・テムルの740年（1339年7月9日～1340年6月26日）のコインがその生前に出されていたとすれば、1339年中に起こったとされるアリー・スルトンの篡奪および修道士たちの「殉教」は、740年の前半に起こったことになり、おそらく1339年中、おそらく翌年1340年ジョバンニ修道士が来た時までにはアリー・スルタンは殺されていた。ジョバンニ修道士が来た時に、ムハンマド・ハンが即位していたかどうかの報告はないが、ムハンマド・ハンの741年（1340年6月27日～1341年6月16日）のコインがあるので、1341年6月までには即位していた。ムハンマド・ハンについてそれ以外のことはまったくわからない。

また、ジンクシ、ユスン・テムルの2人のハンのコインは共通してオトラル、テルメズ、バダフシャーンにおいて打たれている。ユスン・テムルとムハンマド・ハンのコインは、共通してアルマリクとテルメズにおいて打たれている。これらのミントの分布を考えると、彼らがアルマリク周辺だけに権威を保つハ

ンではなく、マー・ワラー・アンナフルを含むチャガタイ・ハン国全体の支配者と認められていた可能性がきわめて高い。

次に、年代記史料にはまったく現れないスルタン・ハリール・アッラーという名が打たれたコインがあら

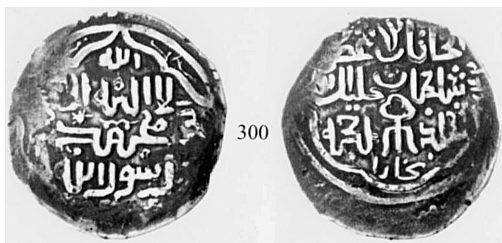


図2 ブハラで打たれたスルタン・ハリール・アッラーのコイン。

Fedorov(2008) : 37, no. 300 reproduced with kind permission of Ernst Wasmuth Verlag

われる。ハリールの名を持つコイン全ての上には、ケペク・ハン以来チャガタイ・ハン国内で打たれたコインやチャガタイ・ウルス発行文書の末尾に押される印〔松井(1998):4, Cerensodnom, Taube(1993):Tafel 29-38, 40〕にあらわれる「チャガタイ・タムガ」とよばれるマーク〔図1参照〕ではなく、下を向いた三つ又の矛の上に三つ葉が乗ったマーク〔図2参照〕が打たれている⁽¹⁹⁾。オリヴァーは、スルタン・ハリールの名が打たれたコインは、サマルカンドで打たれた74x年の1枚、ブハラの744年の2枚をあげているだけだが〔Oliver(1891):13, nos. 12-14〕⁽²⁰⁾、他にブハラの742年、743年、744年の年代を持つ7枚のコイン〔Fedorov(2008):36-39, nos. 298-305〕、テルメズで打たれた1枚(年代読めず)〔Schwarz(2002):130-31, no. 1114〕、オトラル(balda-yi Otrār)で打たれた742年の年代を持つコインが一枚発見されている。しかし、このオトラルのコインの上には、Khalīl Allāhの名の上段に Sulṭān Qazān Temurの名が明確に読める〔Mayer(1998):16-17, no. 34〕。

貨幣研究では、ハリールとは別人と分類されている(22)カザン・スルタンのコインの上にも、ハリールのコインと同じマークが常にあられる〔図3参

(19) どちらのマークについても、その意味つまりそれが示すところのものがわからない。従ってコイン上のマークが異なることの意味もわからないが、1282-83年以降のチャガタイ・ウルスはドゥワ家政権であり、反乱者「ヤサウルの子ハリール」は、チャガタイの子孫ではあるがドゥワとは別の一族に属することと関係しているかもしれない。

(20) ブハラの no. 14 には、Khalīl Tīmūr という名があらわれている。



図3 743年にバダフシャーで同じ刻印によって打たれたカザン・スルタンの名のある二枚のコイン。

Schwarz (2002) : 61, nos. 405-06 reproduced with kind permission of Ernst Wasmuth Verlag

照]。オリヴァーは、バダフシャーで747年に打たれたカザン・スルタンの名を持つコイン、ブハラの746年、744年のそれぞれカザン・スルタン、カザン・ティムール Tīmūr・ハンの名を持つコインをあげ [Oliver (1891):13, nos. 15-17], 他に、ブハラのでは745年、746年の年代を持つ13のコインが見つかった [Fedorov (2008):38-39, nos. 306-19]。バダフシャーのでは、743年の

年号を持つコインを含む5個が残存している [Schwarz (2002):60-61, nos. 405-09]。テルメズで出された、スルタン・カザン・テムルまたはカザン・テムル・ハンの名をもつコイン8個のうち唯一年代のわかる no. 1113は、742年に打たれている [Schwarz(2002):130-31, no. 1113, nos. 1115-20]。

次の、アミール・カザガンの傀儡ハン (23) ダーネシュマンドチャのコインの年代の分かるのは全て747年になっており [Oliver(1891):13, Mayer(1998):16-17, no. 35, Schwarz(2002):130-31, 168-69, nos. 1121-22, no. 1502, Fedorov(2008):38-39, 98-99, nos. 320-22, nos. 990-94]⁽²¹⁾, その上には再び「チャガタイ・タムガ」マークがあらわれる。

以上のコインの調査から、ムハンマド・ハンとの関係は不明だが、カザン・テムルは、742年 (1341年6月17日~1342年6月5日) には即位してコインを打た

(21) コイン上ではダーネシュマンド・シャーとなっている。

せており、744年までは、おそらく彼のムスリム名のハリール・アッラーの名前でもコインを打たせていたこと、すなわちハリール・スルタンとスルタン・カザン・テムルは同一人物であり、彼のコイン上の統治年代は742年から747年であることが明らかになった。この君主が、バハー・ウッディーンが仕え、「マー・ワラー・アンナフルの王国の帝王となった」スルタン・ハリールであることは疑いない。バハー・ウッディーンは、それ以前にハリール・アタに6年間仕えているから、735年前後にこの人物は「ブハラのバーザール」に現れたことになり、バハー・ウッディーン18歳頃という記述とあう。6年間統治したというバハー・ウッディーンの手紙を信じれば、少なくともマー・ワラー・アンナフルにおいては、741年からその支配がはじまっていたと推定することができる。

以上の結論を前提とすれば、イブン・バットウータの「スルタン・ヤサウルの子ハリール」の「聖戦 (jihād)」、すなわちハリールがブザンを倒し、アルマリクを経て「カラコルムとビシュバリク」を征服し、帰って短期間マー・ワラー・アンナフルの支配者となったという話は、734年のブザン/ブランの反乱事件と741年または742年のヤサウルの子カザン/ハリールの即位とを混同して繋げてしまったものであると考えられる。ハリールの征服の話も、ハーフィズ・アブルーの伝えるカザン・ハンの支配領域「〔トゥルフアン盆地の〕カラ・ホジャからダシュテ・キプチャクの果てまで」が事実であるとすれば、カザン／ハリールによる北方遠征(ムハンマド・ハンの支配領域への)が存在した可能性を示している。

イブン・バットウータおよびティムール朝年代記は、両者ともカザン／ハリールの即位を735年以前とし、年代記では統治期間を12年以上としている。これは、即位時期の誤認が原因であるが、誤認の原因として、ブザンの反乱とハリールを結びつけるような言説が、インドのみならず中央アジアにも存在していた可能性が想定されよう。または、それは735年前後に、カザン／ハリールがトルコ人のスーフィーとしてブハラのバーザールに現れたという「事実」と関係があるかもしれない。もしかしたら、彼はブザンの反乱の混乱に乗じて、マー・ワラー・アンナフルに乗り込んで、その時点で、そこに小さな政権を建

てたのかもしれない。しかし、これらは全て想像に過ぎない。同時代史料とはいえイブン・バットウタの話自体が伝聞であり信用できるものではなく、740年または741年のムハンマド・ハンの即位とドゥワの子や孫ではなく、チャガタイの子孫ではあるが別の一族に属する反乱者ヤサウルの子カザン/ハリールの741年または742年の即位との関係がまったくわからないからである。

確実に言えることは、チャガタイ・ハン位は735年以降もアルマリクのハンたちのもとにあり、アルマリクにおける内紛後にムハンマド・ハンが即位した後の742年にはカザン/ハリールはチャガタイ・ハンとして即位しており、少なくともマー・ワラー・アンナフルを747年まで支配したということである。しかし、ティムール朝年代記作者たちはこのハンの在位年代を、何らかの理由で12年間以上と誤解し、また彼のハリール・アッラーという名を知らなかった。このことが、ティムール朝年代記の歴代チャガタイ・ハンの在位年代に6年以上のずれを生じさせることになり、また現在の研究者たちにハリールとカザンが別人であるとか、1334年時点でのチャガタイ・ハン国の分裂というような憶測〔Manz(1989):24〕を生じさせることになったのである。

お わ り に

718年中央アジアのブハラに生まれたナクシュバンディー教団の始祖バハー・ウッディーンは、18歳ごろから(736年前後)、ブハラにトルコ人スーフィー、ハリール・アタとして現れた後のチャガタイ・ハン、ハリール・スルタン・カザンに仕え、747年まで12年間、後半の6年間は君主の側近として仕え、チャガタイ・ハン政権の崩壊を見た後ブハラに帰り、その後(サンマースイーの死の755年以降)、おそらく祖父の関係していたホージャガーン教団の六代目シャイフと称するアミール・コラルルのもとに弟子入りした。おそらくコラルルが亡くなった772年頃から、コラルルの第一ハリーフアとされている〔MAK:79〕マウラーナー・アーリフ・ディーグガラニーに7年間師事した。その後、おそくとも779年頃、61歳頃から、生地ブハラのカスレ・アーレファーン村において73歳でなくなるまで自らの弟子を集め教導した。その弟子たちこそがナ

クシュバンディー教団の^{もとい}基である。

彼とチャガタイ・ハンとの関係は、後の教団シャイフたちが持ったような一般的なスーフィーの「聖者と支配者」の関係ではなく²²⁾、君主と側近の関係であった。しかし、そのことによって、彼は、国家権力の強さと残酷さ、またそのもろさと虚しさを、その内部で身をもって体験したに違いない。この人間がブハラのアジャメーン教団に入信することによって生まれた思想が、ナクシュバンディー教団としてのスーフィズムである。このナクシュバンディーイズムのなかには、名祖・始祖の「現世と世俗の仕事」への強い諦念と否定的な国家権力観が織り込まれていたかもしれない。もしも、この「感覚」が、伝統として歴代のシャイフたちに伝えられていったと仮定するなら、多くの地域に拡大し最大のスーフィー教団として今日にいたるまで活動してきたこの教団のシャイフたちの、さまざまな局面で発揮された「聖者と支配者」との関係における「強さ」の秘密はそこにあるのかもしれない。

また、本稿ではバハー・ウッディーンの回想の「6年間の統治」という言葉によって、最後のチャガタイ・ハンの在位期間を確定し、それによってティムール朝時代に書かれた歴史書のチャガタイ・ハン国時代の支配者の在位期間や即位年代の大きなずれを検証し、確認し、その理由を推定した。

次に、ATUS, MAKなどの聖者伝の精読により、14・15世紀の教団シャイフたちが活動したのはどのような社会であったのかを究明し、また、14世紀後半のアミール・カザガンのカラウナス政権や初期ティムール朝政権とバハー・ウッディーンおよび彼の教団をも含めた中央アジア・オアシス定住民社会との相関関係を明らかにしていかなければならない。それらの研究において、本稿によってほぼ完全に復元された1330年代以降のチャガタイ・ハン国のクロノロジーは大きな力を発揮するであろう。

22) 聖者の概念については、簡単には川本(2005b)を見よ。チャガタイ・ハン国時代およびティムール朝時代における「聖者と支配者」の関係については、川本(1986), Paul(1990), 間野(2001):383-93参照。また、聖者伝の中に書かれている具体的なティムール朝時代の聖者と支配者との接触の場面は、川本(2005a):1-69に読むことができる。

文献略号表

資料

- AT'US「長編」tx.: Ṣalāḥ b. Mubārak Bukhārī, *Anīs al-Ṭālibīn wa 'Uddat al-Sālikīn*, ed. Khalīl Ibrāhīm Ṣarī Ughlī, Tehran, 1993.
- AT'US「短編」tx.: *Anees Talebeen of Baha'uddin Naqshband (d.791 H) abridged by Abdurrahman Jami (d. 898 H)*, ed. Muḥammad Zakir Hussain, Khuda Bakhsh Oriental Public Library, Patna, 1996.
- AT'US「短編」ms. A: Bodleian, Persia e37, 44a-144b, *Kitāb Anīs al-Ṭālibīn wa 'Uddat al-Sālikīn li-Ṣalāḥ b. Mubārak Bukhārī al-mutawaffā sana-yi 785*.
- AT'US「短編」ms. B: Bibliothèque Nationale, Suppl. Persan 968, 89a-146a, *Risāla-yi Maqāmāt-i Naqshband dar 'Ashr Rasā'il fī al-Sulūk*.
- DhJT: Ḥāfiẓ-i Abrū, *Dhayl-i Jāmi' al-Tawārīkh-i Rashīdī*, ed. Khānbābā Bayānī, Tehran, 1350/1931-32.
- 『元史』1～4:『百衲本二十四史 元史(明洪武刊本)』1～4, 台湾商務印書館.
- ḤS: Ghiyāth al-Dīn b. Humām al-Dīn al-Ḥusaynī al-mad'ūw bi-Khwāndamīr, *Tārīkh Ḥabīb al-Siyar fī Akhbār Afrād Bashār*, ed. Jalāl al-Dīn Humā'ī, vol. III, Tehran, 1333/1955.
- ḤStr.: Khwandamir, *Ḥabibu's-siyar Tome 3*, tr. by Wheeler M. Thackston, Harvard University, 1994.
- MAMA: Ibn Allāh al-'Umarī, *Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amṣār: Mamālik Bayt Jinkiz Khān*, ed. Klaus Lech, Wiesbaden, 1968 (*Asiatische Forschungen, Band 22, Das Mongolische Weltreich*).
- MAK: Shihāb al-Dīn b. bint Amīr Ḥamza, *Maqāmāt-i Amīr Kulāl*, Lithographed ed., Bukhārā, 1328/1909.
- MAK ms.: рук. ИБ АН СССР, № С 1412, 1a-76a, Shihāb al-Dīn b. bint Amīr Ḥamza b. Amīr Kulāl, *Maqāmāt-i Sayyid Amīr Kulāl*.
- N: Nūr al-Dīn 'Abd al-Raḥmān Jāmī, *Nafahāt al-Uns min Ḥaḍarāt al-Quds*, ed. Maḥmūd 'Ābidī, chap-i 2, Tehran, 1995.
- R: Fakhr al-Dīn 'Alī b. Ḥusayn Wā'iẓ Kāshifī, *Rashaḥāt-i 'Ayn al-Ḥayāt*, ed. 'Alī Aṣghar Mu'iniyān, 2 vols., Tehran, 2536/1977.
- RIB: Ibn Baṭṭūṭa, *Riḥlat Ibn Baṭṭūṭa*, Dār Ṣādir, Bayrūt, no date.
- イブン・パットウータ(訳): イブン・パットウータ『大旅行記4』家島彦一訳注, 平凡社, 1999.
- ShAt: *Shajarat al-Atrāk*, ms. British Museum, Add. 26190.
- ShZN: Niẓām al-Dīn Shāmī, *Ẓafar nāma*, Tome I, ed. Felix Tauert, Praha, 1937.
- 東洋旅行記(1979): オドリコ『東洋旅行記——カタイ(中国)への道——』家入敏光

訳、桃源社。

TR: Mīrzā Muḥammad Ḥaydar Dughlāt, *Tārīkh-i Rashīdī*, ed. ‘Abbāsquī Ghaffārī, Tehran, 2004.

ZT: Ḥāfiz-i Abrū, *Zubdat al-Tawārīkh*, ed. Sayyid Kamāl Ḥājj Jawādī, vol. I, Tehran, 2001.

ZT (Tauer): Ḥāfiz-i Abrū, *Zubdat al-Tawārīkh* in Niẓām al-Dīn Shāmī, *Ẓafar nāma*, Tome II, ed. Felix Tauer, Praha, 1956.

YZN: Sharaf al-Dīn ‘Alī Yazdī, *Ẓafar nāma*, vol. I, ed. Sayyid Sa‘īd Mīr Muḥammad Ṣādiq, ‘Abd al-Ḥusayn Nawā‘ī, Tehran, 2008.

研究

Algar (1987): Hamid Algar, s.v. Anīs al-Ṭālebīn wa ‘Oddat al-Sālekīn, *EIr*, vol. II : 76-77.

Algar (1989): s.v. Bahā’-al-Dīn Naqṣband, *EIr*, vol. III: 433-35.

Algar (1990): “A Brief History of the Naqshbandī Order”, *Naqshbandis: Historical Developments and Present Situation of a Muslim Mystical Order*, ed. par Marc Gaborieau, Alexandre Popovic et Thierry Zarcone, Istanbul/Paris: 3-44.

Algar (1993): s.v. Nakshband, *EF²*, vol. VII: 933-34.

Aubin (1976): Jean Aubin, “Le khanat de Čagatai et le Khorassan (1334-1380)”, *Turcica*, 8-2: 16-60.

Barthold (1928): Vasilii Vladimirovichi Barthold, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, GMS, New Series, V, London (4th ed. 1977).

Barthold (1956): *Four Studies on the History of Central Asia, Volume I: 1. A short history of Turkestan, 2. History of Smirechyé*, tr. by V. & T. Minorsky, Leiden.

Barthold (1963): *Four Studies on the History of Central Asia, Volume II: Ulughbeg*, tr. by V. & T. Minorsky, Leiden.

Biran (2002): Michal Biran, “The Chaghadaids and Islam: The Conversion of Tarmashirin Khan (1331-34)”, *Journal of the American Oriental Society*, 27-4: 742-52.

Cerensodnom, Taube (1993): Dalantai Cerensodnom, Manfred Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*, Berlin.

Fedorov (2008): Michael Fedorov, Boris Kocnev (†), Golib Kurbanov, Madeleine Voegeli, *Sylloge Numorum Arabicorum Tübingen : Buḥārā/ Samarqand XV a Mittelasien/ Central Asia I*, Ernst Wasmuth Verlag, Tübingen/ Berlin.

稲葉 (1995): 稲葉稜「ガズナ朝のナディーム」『東方学』89: 118-104.

‘Irāqī (1975): Aḥmad Ṭāhir-i ‘Irāqī, “Muqaddima”, in Muḥammad b. Muḥammad Pārsā, *Qudsiyya*, ed. Aḥmad Ṭāhir-i ‘Irāqī, Tehran: 1-93.

- Jackson (2000): Peter Jackson, s.v. Tughluk Temür, *EF*², vol. X: 590–91.
- 加藤 (1999): 加藤和秀『ティムール朝成立史の研究』北海道大学図書刊行会.
- 川口 (2007): 川口琢司『ティムール朝帝国支配層の研究』北海道大学出版会.
- 川本 (1986): 川本正知「ホージャ・アフラルとアブー・サイード——ティムール朝における聖者と支配者——」『西南アジア研究』25: 25–50.
- 川本 (2000): 「イスラーム神秘主義教団」間野英二編『アジアの歴史と文化 9 西アジアの歴史』同朋社: 203–217.
- 川本 (2005a): マウラーナー・シャイフ (川本正知訳注)『15世紀中央アジアの聖者伝 ホージャ・アフラルのマカーマート』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 川本 (2005b): 「書評と紹介 赤堀雅幸・東長靖・堀川徹『イスラームの神秘主義と聖者信仰』(イスラーム地域研究叢書7) 東京大学出版会 (2005年1月刊, xiii + 340頁)」『イスラーム世界』65: 114–126.
- 川本 (2010): 「モンゴル帝国における戦争——遊牧民・軍隊・国家とその定住民支配——」『アジア・アフリカ言語文化研究』80: 113–51.
- 間野 (2001): 間野英二『バーブルとその時代 バブルナーマの研究4 研究編』松香堂.
- Manz (1989): Beatrice Forbes Manz, *The Rise and Rule of Tamerlane*, Cambridge.
- 松井 (1998): 松井太「ウイグル文クトルグ文書」『内陸アジア言語の研究』13: 1–62.
- Mayer (1998): Tobias Mayer, *Sylloge Numorum Arabicorum Tübingen : Nord- und Ostzentralasien XV b Mittelasien II*, Ernst Wasmuth Verlag, Tübingen/Berlin.
- Molé (1959): Marijan Molé, “Autour du Daré Mansour: l'apprentissage mystique de Bahā' al-dīn Naqshband”, *Revue des Études Islamiques*, 27: 35–66.
- Oliver (1888): Edward Emerson Oliver, “The Chagatāi Mughals”, *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series*, 20: 72–128.
- Oliver (1891): “The Coins of Chagatāi Mughals”, *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 60, 1–1: 8–16 (With four plates).
- Paul (1990): Jürgen Paul, “Scheiche und Herrscher im Khanat Čağatay”, *Der Islam*, 67–2: 278–321.
- Paul (1998): *Doctorine and Organization : The Khwājagān/Naqshbandīya in the first generation after Bahā'uddīn (ANOR ; I)*, Berlin.
- 佐口 (1942): 佐口透「十四世紀に於ける元朝大カーンと西方三王家との連帯性について——チャガタイ・ウルス史研究に寄せて——」『北亜細亜学報』1: 151–214.
- Schwarz (2002): Florian Schwarz, *Sylloge Numorum Arabicorum Tübingen : Balḥ und die Landschaften am oberen Oxus XIV c Ḥurāsān III*, Ernst Wasmuth Verlag, Tübingen/Berlin.

Togan (1968): Zeki Veridi Togan, “Ghāzān khān Khalīl va Khwāja Bahā’ al-Dīn Naqshband”, *Necati Lugal Armağanı*, Türk Tarih Kurumu Basımevi, Ankara: 775-84.

植村 (1942): 植村清二「察合台汗國の興亡(4)」『蒙古』9-1:76-92.

tral authority of the Qing dynasty, the various provinces charged with procuring copper, and the Yunnan provincial government, which all had disparate interests, rather than as a tool for the central headquarters to collect information and then determine and implement policy. The consolidation of the procurement that settled on the procurement of Yunnan copper in 1738 was nothing other than a haphazard system that appeared as a result of coincidence of disparate interests and was not backed up by some wide-ranging, rational decision. However, the unforeseen result was that the minting of copper coins in Beijing smoothly entered its heyday.

THE LIFE OF BAHĀ' AL-DĪN NAQSHBAND (1318-89) AND THE END OF THE CHAGHATAY KHĀNATE

KAWAMOTO Masatomo

The eponymous and ancestral founder of the Naqshbandiyya, a Sufi order (*ṭarīqa*), was Bahā' al-Dīn Naqshband (H.718-91), who was a Sufi spiritual master of many disciples in Bukhara in Central Asia during the 14th-century A.D.. Khalīl Atā, his Turkish spiritual master who appears in *Anīs al Tālibīn wa 'Uddat al-Sālikīn*, an hagiography of Bahā' al-Dīn Naqshband that was written by Ṣalāḥ b. Mubārak Bukhārī, is none other than Qaḍān Sulṭān, whom Bahā' al-Dīn was alleged to have served as an executioner (jallādī) in *Maqāmāt-i Amīr Kulāl*, another hagiography written by Shihāb al-Dīn b. bint Amīr Ḥamza. Bahā' al-Dīn served Khalīl Atā for 12 years from the age of approximately 18 (circa 736), and it is clearly written that during the last six of those years he served his master, who under the name of Khalīl Sulṭān became the ruler of Mā warā' an-Nahr. Bahā' al-Dīn was probably a member of the group of close associates (*khāṣṣa*), who would even have had to carry out executions. On the basis of the number of years that Bahā' al-Dīn served Khalīl Atā and his estimated age, I employed previously underutilized studies of the coinage issued by the Chaghatay khānate to prove that this Khalīl/Qaḍān was Qazān Sulṭān, the son of the rebel Yasaur, who was in practical terms the last Chaghatay Khān and who was killed in the second battle with Amīr Qazāghān of Qārāunās in 747 (1346) and his reign lasted five or six years from either 741 or 742 to 747. Then, I infer the reason why that in the historical chronicles written during the Timurid dynasty the period of his rule is erroneously

recorded as lasting either 12 years from 735 or 14 years from 733, and I was able to clarify that the present-day scholars who have accepted these dates have depicted a mistaken portrait of the final period of the Chaghatay khānate.

**THE LIFE OF A LITTLE-KNOWN INTELLECTUAL
OF THE MAMLUK PERIOD: THE CASE
STUDY OF AḤMAD AL-‘AYNĪ**

NAKAMACHI Nobutaka

Shihāb al-Dīn Aḥmad al-‘Aynī (1363- at least 1431) does not appear in any contemporary written sources and was nearly anonymous in the ‘*ulamā*’ society of his day, but as he was the younger brother of the famous historian Badr al-Dīn Maḥmūd al-‘Aynī (1361-1451), several manuscripts of works that were either copied or authored by Aḥmad are extant, and from the fragmentary records found therein, the course of his life can be reconstructed.

This article analyzes Aḥmad’s life in terms of the following three points: his obtaining of knowledge, exercise of that knowledge, and the reproduction of that knowledge. First, as regards obtaining knowledge Aḥmad was much inferior to his elder brother Maḥmūd in terms of the length of his studies, the number of teachers, and the contents of the texts he studied, but he was a master of recitation of the Quran and Islamic scholarship; jurisprudence, *taṣawwuf* and so on. And, as regards the exercise of knowledge, Aḥmad preached to his neighbors and donated his books to the Azhar Mosque, but these acts did not directly lead to obtaining a stipendiary post or monetary profit. In regard to the reproduction of knowledge, it can be pointed out that for Aḥmad, who actually appears to have engaged in commerce, knowledge was not for material gain but rather an aid in enhancing social prestige or providing an education to his son Qāsim as a pragmatic bureaucrat.

When Aḥmad’s career viewed in this light, he can be seen as of little significance in ‘*ulamā*’ society, but this should not be linked simply to any flaw in his character as an individual. Although he was excluded from both ‘*ulamā*’ society and the bureaucratic hierarchy, he maintained prestige in local society, and the life course of Aḥmad, who upheld knowledge that would be conveyed to the next gen-